編　集　後　記

2015年の医学生理学分野のノーベル賞を大村智先生が受賞されましたが、大村先生が見つけた薬剤が世界中の寄生虫疾患患者を救ったとのことです。日本中が喜びに沸く大変嬉しいニュースでした。大村先生は静岡の有名ゴルフ場に近い場所の土の中から採取した微生物の中にこの薬剤の元となる物質であるエバーメクチンを探し当てたとのことです。エバーメクチンの一部を変化させた化合物がイベルメクチンです。イベルメクチンは当初は動物の寄生虫感染のための薬として販売されましたが、その効果は抜群であり、副作用もさほどないことがわかったためヒトの寄生虫疾患にも応用されるようになったとのことです。我々も疥癬の治療に大村先生のイベルメクチンの内服薬を使用していますが、この薬剤が保険適応になるまでは疥癬の治療には大変困っていました。黒田官兵衛もかかったとされるこの寄生虫疾患に対して、以前は硫黄やオイラックス、安息香酸ベンジルやγBHC（ともに自家製剤）などによる治療が行われていましたが、効果は今ひとつでした。現在はさらにもう１種類の疥癬治療外用薬であるスミスリンローションが保険適応になり、以前とは比べものにならないくらい疥癬は治りやすくなりました。これも大村先生のおかげです。

病院紀要第54巻では３編の論文が掲載されましたが、最初に多胎妊娠の問題点と管理についてのわかりやすい総説があります。不妊治療により多胎妊娠が増加し、多胎妊娠ではリスクが増えるため母体側と胎児側の合併症に注意をしながらガイドラインに従ってフォローアップする必要があるとのことです。月経随伴性気胸の報告では病理検査で横隔膜の筋組織中に異所性子宮内膜が見られ、月経周期と関連したと考えられる再発性の気胸が見られたとのことです。子宮内膜症が気胸の原因になるとは、「へぇ！」と驚きました。また、JICAの協力事業の一環として３年間にわたってベトナム・ダナン産婦人科小児科病院の看護師の新人教育プログラムに参画した内容が記載されましたが、ベトナムの医療や医療教育の現状がよくわかります。ベトナム・ダナン産婦人科小児科病院から36名の研修生が来日し、西市民病院や神戸市看護大学で感染管理、コミュニケーション、フィジカルアセスメント、がん患者の看護および技術や知識の伝達についての研修を受けてベトナムに帰国しました。その後の現地でのアセスメントでは研修後には看護に関する知識・技術の向上の普及の体系作りという観点から良い評価が得られたとのことです。今回はこのように産婦人科領域に関連する論文ばかりとなりました。第55巻はどうなるでしょうか。楽しみです。

西神戸医療センター　皮膚科
堀　川　達　弥